

構造改革のポイントは生命遺伝子の復活にある

2002. 8

- ・ シンクタンク藤原事務所リサーチアソシエイト
- ・ 国際資本市場ストラテジスト

園 山 英 明

1. 原因解明なくして改革なし

- ・・・何故 日本の不良債権と公的債務は増え続けるのか

それは大恐慌後再建されたアメリカ型証券、金融、資本市場メカニズムの持つ自己制御機能の存在を見落として日本が水割り酒経済に溺れてしまったことにある。

小泉首相の掲げる「聖域なき構造改革なくして日本の再建なし」のスローガンに日本中の鬱積した人々は激しく反応した。

国中が原因不明のうつ病にとりつかれ身動きのとれなくなった難民にとってリスクをとって方向を示してくれるリーダーへの期待は大きい。

それほど、日本は狭い安楽死空間にはまりこんで悩んでいるのである。しかし、問題は改革の先に何が待ちかまえているかであり、どのような準備をすれば良いかである。

今、日本では長い年月の中で腐敗しきった部門の洗い出しと切除、改革という大作業に取りかかろうとしている。問題は腐敗部分の改革だけにあるのではない。新たに挑戦

する方向を見定めることにある。そのためには何故このような事態に陥っているのか、そのメカニズムの欠陥の原因をつきとめなければ大改革の先にあるグランドデザインが画けないのは当然である。

2. 動物遺伝子の暴発から生れるアメリカ型バブルとは異質の植物異常増殖から生まれた日本型バブル

…巨大になりすぎて修正を求められている恐竜型のアメリカ型市場経済バブルと植物型バブルの日本の違い

アメリカは、2001. 9. 11テロによるツインタワーの崩壊、エンロン・ワールドコムなどの会計不信によるマーケットの急落などによって市場経済メカニズムそのものが崩壊の危機に直面しているように見える。

しかし、このアメリカ型のバブルと日本のバブルの崩壊とは基本的に異なっているのである。

1934年、アメリカは大恐慌の経験から生み出したアメリカ型の新しい証券・金融・資本市場経済システムを創りあげた。

その基本にあるのは、

- ① 1930年代に銀・証分離政策をとり私益欲望の暴発エネルギーを一時的に封じこめると同時にマーケットの中心軸となる公益軸を確立しベンチャー企業活力の回復を図るため厳しい銀行・証券市場取引関係基本法を制定し市場経済P・L（品質）チェック機能を確立した。
- ② 1970年代にはこの強化された公益軸と金融P・L（品質）機能をバックに一転

して今まで分離してきた私益欲望機能を結合し、銀・証・商品・資本・情報機能と新たに機軸通貨ドルを束ねて新しい国際資本市場メカニズムを創り上げ国際市場経済はけん体制を拡げてきたのである。そのベースとなるのは人々の持つ夢を実現させようとする意欲と、その意欲をうまく生かす為に必要な公益軸と推進・制御・決済機能という集団制御機能である。

- ③ 2000年に入って、このグローバルメカニズムはあまりにも巨大になりすぎて自己腐敗と餌物不足によってマネー資本自己増殖メカニズムそのものを見直さなければならぬ時を迎えることになったのである。
- ④ しかしその動物遺伝子活用型の証券・金融・資本市場メカニズムの根底にある欲望活用型の基本哲学もマーケットの基本メカニズムもあまり変わっていない。
- ⑤ 問題はこの動物遺伝子で創られたアメリカ型の市場メカニズムと植物遺伝子で作られた日本の証券・金融・資本市場メカニズムとではその基本的なインフラメカニズムが異なっているにもかかわらず、日本中の識者がその違いについてほとんど理解していないことである。

それは動物遺伝子を持って自己の意思で変化に挑戦し自己決済力と制御力を持って膨張したり収縮することのできるインフラメカニズムを備えていながら暴発してしまうアメリカで発生しているバブルと、植物遺伝子しかない日本のバブルとの違いである。

具体的には、変化の先取りと強制決済力に頼って生きる動物集団と、自ら動くことも自力決済も自己収縮も出来ないままその命運を天に委ねる植物型集団の違いである。

巨大になりすぎた恐竜のアメリカは、自己の持つ収縮プログラムに従って腐敗部分を

探し出し自らの力で摘出し新しい戦略を建て再出発することは可能である。

しかし日本のような自己決済力を持たない植物型の社会にあっては、自らの戦略的意
思によって決済し自己収縮をしてマイナス条件を吸収するプログラムを用意していな
いだけで今のような大変化に対応するには、それなりの時間を必要とするのである。

3. 時価主義型市場経済への転換を迫られてはじめて知った自己腐敗の大き さと、強制決済力と付加価値造出力を持った時価型市場経済システムの持 つ構造破壊力の存在

日本が世界一の金融資産大国と煽てられ浮かれている間に今度はあつと言う間に現
在のような構造腐敗に悩み莫大な借金国家になってしまったのは何故なのであろうか。
その原因はたくさんある。

しかし、その原点を辿ってみると第二次大戦後導入されたアメリカ型証券市場の持つ
心臓部分の特色・・・仮需要というスペキュレーションエネルギーを使って新しい実需
経済成長力を導き出し、その成長競争力を市場で評価した価格＝「時価」で表現するプ
ライスマカニズムの果たす役割と自己制御機能の重要性について殆ど理解されること
なく形だけの市場経済化をはかっていたことにあるように思える。

(1) 財産目録時価と損益計算書時価

日本では、はじめはこの証券取引メカニズムによって作られる「時価」をベースとす
る証券市場経済システムの取り入れ方如何で国民経済システム全体が今のように大き
な影響を受けることがよく分らないまま、土地、株式などの資産を「仲間うちで評価」

しあった「形式上の需給でできた価格」で金融取引とか課税計算とか国民経済計算を行ない経済運営がはかられてきたのである。

しかし、結果的に考えて見ると「富の蓄積」に重点を置く農耕民族と「餌物の価値」に重点を置く狩猟民族とでは「証券」「取引」の目的も又その「時価」の評価の基準も実現の方法も異なっているのである。

日本の場合、備蓄米をどれだけ貯めて将来に備えるかが問題であって求めているのは安心であり量であり価格は二次の話だったのである。言わば財産目録に仮の時価をつけ資本と資産が増えたとして安心していただけのものだったのである。

一方、狩猟民族の考える時価とは今日の命を保つために必要な餌物をとる知恵を生む遺伝子の値打ち・・・餌物をとる「しかけ」のはたらきを人々が集まって評価したものが「時価」なのである。

つまり農耕民族は仲間うちで動物遺伝子の入っていない備蓄米の「量」を求めているのに対し狩猟民族は「付加価値創造機能」・・・狩猟器具、魚群探知機、I・Tなど外部との競争手段のはたらきとコストからその本物の「動物遺伝子の値打ち」を求め餌物獲得のための効率を高めているのである。

こうして考えてみると、今論じている時価主義の問題は単なる会計技法の問題ではなく民俗文化、社会構造、基本哲学の違いから生まれているもので「時価」のとらえ方如何によって社会構造そのものが変わってしまう程、国家・民族の存亡をかけた大問題であることが分ってくる。

(2) 評価権を奪われ迷走する市場競争敗戦国の悲劇

今、日本ではこの民族の命運をかけたこの大問題の本質が殆ど論じらないまま、技術論だけが先行する中で時価型の市場経済システムへの大構造転換を迫られ振りまわされているのである。

つまり時価会計を通じて日本が基盤としてきた仲間うち中心に作ってきた長期的な社会構造そのものの大構造改革を迫られている危機にあるのである。

天とお上と他力に依存し強制自己改革力の乏しい農耕民族にとって外圧に依存して改革を行なうことも一つの手段ではある。

しかし、今の日本には外圧の是非を判断する力すら失っているほどの混迷状態にある。

このまま今の流れに従って進んでゆけば地価はまだまだ数百兆ベースで値下がりを受け、不良債権はとめどもなく発生し、日本の資産信用で作られた霜柱が溶け日本の島は世界の狩猟民族の評価基準で作られる時価経済システムという潮の波にあらわれ沈んでゆく運命にある。

バブルで膨らみすぎた資産信用のあと始末をすることは当然のこととして、实体经济の水準をはかる「時価」のとらえ方如何では国家が沈没するほどこの時価なるものが重要であることが分かっていないのである。日本は国家の命運のかかっているこの市場の掟とか会計システムなどについて自らのスタンダードをもつことなく、さ迷い続けることになっているのである。

(3) 手足だけで動いて頭脳と心臓活動の萎えた日本

こうしたなかで今、日本では多くの人々が証券、金融、資本市場がらみの分厚いルールブックを参考にして企業分析、会計制度、法制度、金融システム、有価証券の届出、発

行、流通、検査・・・などキメ細かい仕事に励んでいるように見える。

しかし、悲しいことに日本の証券・金融・資本市場経済システムの基本メカニズムとルールブックには、コストのかかるプールの波消し装置だけ求められていて、肝心の実物経済を推進する動物遺伝子の入ったエンジンとかエネルギーを創り出すメカニズムとか、出力の品質をチェックする本物の推進・制御システムが欠けているのである。

その結果、経済の手足とか葉っぱの部分だけは機能してはしているが肝心の頭脳・心臓部分とか根とか幹が病みサラ金依存型の経済出力はどんどん低下し、とうとう欧米先進国の1/3のROA、ROEになるほどで水割り酒経済病が進んでしまっているのである。

大恐慌の経験で目ざめたアメリカが創り上げた証券市場メカニズムとは、仲間うちの評価損益だけで形だけ動いている日本の兜町型の流通市場メカニズムではない。それは市場経済を主催している国家胴元自らの責任と戒めと決済力とその取引に参画している財政、企業、金融、学術、報道など市場経済全参画者で創り上げた人工心臓メカニズムそのものなのである。今の日本は未だにこの人工心臓の基本メカニズムの原則がよく理解できないまま、植物化した頭脳に頼って出力を低下させながら迷っている状態にあるのである。

4. 造改革のポイントは失われつつある生命遺伝子の復活にある

日本の悲劇は動物型遺伝子を持った人達の活躍によって得られたお金が動物遺伝子を持たない日本の本丸社会に献上された結果、継承すべき遺伝子を持たない備蓄米として名目金融資産だけが膨らみ内部の生活対策費に充当消耗され明日を競い合っている世界のマーケットに還流させるべき生命遺伝子が遮断され循環できなくなっている

ことにあるのである。

それは国政を司る政治、行政、関係者だけでなく経済、市場仲介人、学問、情報伝達者などが自ら動物競争社会における競争システムの本質が理解できないまま、本来動物型遺伝子活性化ために効用があるとされる財政による「ケインズ投資政策」にはまりこみ莫大な資金を投入しながら、その大半を浪費してしまったことにある。

それどころか日本では、安保、ケインズ、お上依存症が一段と高まり変化とリスクに挑戦する動物型生命遺伝子が衰え植物型遺伝子へと先祖帰り現象が進むだけでなく、その植物遺伝子の継承すら危うくなるほど生命力そのものが退化しはじめているのである。

自ら原因究明を怠りリスクをとることを恐れ、決済を避け形だけの長寿とお金の計算と安心だけを求めているだけでは社会の富も生命力も継承されるわけではないのである。